

○8 番（鈴木美香君）

8 番、立憲民主党 鈴木美香です。今日は、2 つ質問いたします。

では、早速 1 つ目、防災についてお伺いします。

能登はまだまだ復興しておらず業者が足りないようで、水道管の復旧も遅れ、日常生活はまだ万全ではない様子です。とりわけ、災害時のトイレ問題は深刻なようで、そこでトイレカーやトイレトレーラー、同じ水を循環して使う循環型シャワー機材などハードな設備も町にも必要ではないかと思います。循環型シャワーについては、先日、新聞記事で徳島県が 5 基保有してあり、3 基を北陸に派遣したとの報道がありました。徳島県は、市町に導入を働きかけているようです。

トイレカーについては、1 台 1000 万程度が相場らしいのですが、国からの補助金があるとのことで、購入も視野に入れることもできます。しかしながら、町単独で購入しなくても、それらを所有している他市町と災害協定を結び、非常時に利用できるようにしておくことも考えられるのではないのでしょうか。これらの設備についてはどう考えますか。お伺いします。

○議長（濱野良一君）

総務課長 濱口浩司君。

○総務課長（濱口浩司君）

鈴木議員の 1 点目のご質問にお答えいたします。

災害時におけるトイレ対策として、本町では、携帯トイレならびに簡易トイレおよびポータブルトイレを備蓄しております。なお、シャワー機材については、現在備蓄してございません。

一方、能登半島地震の現況を見ますと、携帯トイレや簡易トイレ、仮設トイレのほか、全国の自治体からの支援等による移動式のトイレカーやトイレトレーラーが避難者の方々に大いに喜ばれたと報道されております。給水タンクから水を流すことができるため清潔で、室内も広く、便座も洋式となっており、子どもや高齢者などが気兼ねなく使用できることから、感染症や災害関連死の予防、避難ストレスの緩和などにおいて、非常に有用なものであると認識しております。

しかしながら、鈴木議員のご指摘のとおり、1 台あたりの費用が高額で、町の財政状況において調達することが難しいため、県内の所有状況の把握や他県との広域連携、民間企業との協定などについて研究してまいりたいと考えております。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○8 番（鈴木美香君）

確かに、ひと月、ふた月経ったあとは、どんどんトイレのそういう設備が助け

に入ったんですけど、当初のひと月ぐらいは、お年寄りはおもう和式がほとんどで、公の施設。本当に困るっていうのが、もうすごく発信されてたんです。なので、町単独でも 1000 万ぐらいただったら、1 基、2 基持つといてもいいのかなと私は思いますけど、そのあたりをやっぱりシビアに即即、昨日も大雨ですごく怖い思いしまして、やっぱりこういう異常気象は、いつ何どき何があるかわからないです。20 年前からの土庄本町あたりの浸水のときも、やはり下水が上がって、お風呂が相当数の時間入れなかったっていう、その後聞き及びましたので、そのあたりを小豆島本当に災害が少ないとこなので、やっぱり実感、臨場感持つってなかなか厳しいですけど、なったときにすごく困るんですね。

だからそのあたりをちょっと、もうちょっとこう、できればトイレカーを 1 基ぐらい持っていたきたいなというのが私の要望です。トイレ・バス・キッチン、は、災害時の心身の健康にとっても影響してる、先ほど課長もおっしゃいましたけど。公の建物と先ほども申し上げましたけども、やはり和のものが残ってるんですが、今後、図書館も中央公民館も和のものが残ってると思うんですが、全部洋式に変えていくとかいう検討は、まだ検討してませんか。

○議長（濱野良一君）

生涯学習課長 岡本高志君。

○生涯学習課長（岡本高志君）

鈴木議員のご質問にお答えいたします。

図書館については、すでにもう洋式になっております。中央図書館（後ほど、訂正あり）につきましては、施設の老朽化等もございますので、今後につきましては、施設の老朽化対策等々、併せて考えていきたいと考えております。以上です。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○8 番（鈴木美香君）

すいません、図書館私もうっかりしてました。では今後、やはりトイレは、すいません、こだわりますけど、すごく大事なことで心身ともに、ぜひシビアに考えていっていただきたいと思います。

そしたらその次も、災害について関連で、ペット同伴の避難所について伺います。

能登の地震でもペット同伴の避難所設置が、とても問題になっているようです。これは東北大震災のときも、やはりペットのことですごく問題になっておまして、被災家屋に放置されて、そのまま捨てられたペットも続出しているとの報道もあります。ペットは家族です。ペットのために、避難所に行ってなく、それで病気になった方、高齢の方とかが病気になるケースも多々見受けられると

報道されています。町としてどう想定されてますでしょうか。

○議長（濱野良一君）

濱口課長。

○総務課長（濱口浩司君）

鈴木議員の２点目のご質問にお答えします。

ペット同伴の避難については、「土庄町地域防災計画」において、ペットとの同伴避難を動物の災害対策の基本として位置付けており、また、「土庄町避難所運営マニュアル」において、ペットの飼育場所についても、アレルギーやにおい、動物の苦手な方もおられることから、居住スペースからある程度離れた場所に設置することとし、「避難場所運営に必要と考えられるスペース」の一覧表に記載されております。

しかしながら、災害の種類、被害の大きさ、被災者数、地域性などによって条件が異なりますので、各避難所等でその場の状況に応じて、柔軟性のある対応が必要であると考えております。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○８番（鈴木美香君）

先ほど申し上げましたけども、小豆島本当に災害少なくて柔軟についていうのが、たぶん初めてすると行政の方もたぶん相当対応が難しいので、そのときにペットの話はたぶん思いつかないと思うんですね。

ただ、ペットを連れている私もそうなんですけど、ペットを連れている住民はやっぱすごく困ると思うんですよ。だから、もう今の時点で前回もちょっと難しいとおっしゃってたんですけど、ここはペット可とかいう施設を１つ指定してくれて周知してくれると助かるのかなあと思うんですけど、そのあたりはどうお考えでしょうか。

○議長（濱野良一君）

濱口課長。

○総務課長（濱口浩司君）

鈴木委員の再質問にお答えいたします。

基本的にはペット同伴可というふうなことになりますけれども、この地域場所のほうが同じ居住区じゃなくてですね、例えば避難所の外であるとか、そういうようなことになってしまうということでございます。たぶん、一緒におりたいというお気持ちはわかるんですけども、その避難者の方のですね、それぞれの事情がございましてね、その辺のことを考慮しながら、決めていかなければいけないなというふうには考えております。以上です。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○8 番（鈴木美香君）

やはり臨場感というか、嫌いな人はそこに居てるだけでも入れない人っているんですね、一定数。そうなったときに、そのときにどうするかっていうのもあるんです。だからやっぱり私としては、この場所はペット同伴 OK。

例えば、そうですね、湊崎公民館は OK みたいに、はなから決めてくと、そういう混乱もないのかなあと、どうしてもやっぱり思うんですけども、今後の検討課題でよろしく願いいたします。

では 2 つ目、お伺いします。

子育て世代の支援について、小さい子どもがいるお母さん方が外出しやすい環境を整備することが、子育て世代の支援につながると思います。

1 つ目、公の施設も含めトイレにおむつ入れがある場所が少ないと感じます。子育て世代が利用しやすい施設のために、公の施設からトイレにおむつ入れを設置する考えはありますか。ごみ箱があるとおっしゃるんですけど、若いお母さん方は、やはり普通のごみとおむつを一緒に捨てるのはかなり抵抗があると、おむつ入れというごみ箱がほしいという要望です。お伺いします。

○議長（濱野良一君）

総務課長 濱口浩司君。

○総務課長（濱口浩司君）

鈴木議員のご質問にお答えいたします。

役場庁舎の多目的トイレには、おむつ交換台等が設置されており、ふたなしのごみ入れが置いてありますが、おむつ入れとはなっておりません。庁舎には、子育て世代の方々が来庁されていますので、ふたつきのおむつ入れを新たに設置し、使用済みのおむつも入れられるように対応したいと考えております。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○8 番（鈴木美香君）

前向きなお返事ありがとうございます。

ちょっと小さなことで、お手数ですが、よろしく願いしたいと思うんですが、よそから来られる方の、例えば土庄港とか公の機関、ボツボツでいいので、おむつ入れと貼ってるごみ箱というのか、結構大きめのおむつって 1 つ捨てるだけで相当かさばるということです、そのあたりの今後の検討もよろしく願いしたいと思います。

では 2 つ目、新庁舎以外の公の施設におむつ交換のベッドがないところもあり、町主催のイベントなどがあっても、おむつを交換する場所もないので、参加しづらいという声を聞きます。テントを設置するなどの配慮がほしい。また、外

出した公の施設でミルクを作る場所もないので、役場の給湯室などを利用できるような対応の考えはありませんか。

一般的に以前の方は、「そういう子どもを連れて外に出るな」というのが、おそらく今までの子育てのセオリーだったと思うんですけど、やはり今からは考え方が変わって、そういうのもオープンに、小さな子どもでもどこでも行けるというような社会になったほうが、お母様方も若い女性も子育てしやすいと思うので、そのあたりを配慮し、ご検討お願いいたします。

○議長（濱野良一君）

濱口課長。

○総務課長（濱口浩司君）

役場の庁舎に来庁された方が、ミルクを作る際に給湯室を利用いただければと思っております。その際には、職員に一声、声をかけていただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○議長（濱野良一君）

生涯学習課長 岡本高志君。

○生涯学習課長（岡本高志君）

2点目の鈴木議員のご質問にお答えいたします。

生涯学習課が所管する施設でのおむつ交換ベッドの設置状況は、中央公民館をはじめ、総合会館、図書館などの大規模施設や比較的新しく建築された施設の計6施設となっております。

そのうち、町主催イベントの開催が多数行われる中央公民館、総合会館のおむつ交換ベッドは、周知不足により設置場所が分かりにくい状況となっております。早急に案内表示等を設置するなど、利便性向上に努めてまいります。

また、設置ができていない施設は、主に地区体育館など施設が古く、おむつ交換ベッドを設置するための十分なスペースが確保できない施設となっております。

しかしながら、イベント開催時には、地区公民館の一室を、おむつ交換スペースや授乳室などの専用スペースとしてご利用いただくことも可能ではないかと思われますので、子育て世代の方をはじめ、幅広い世代の皆さまがイベントに参加しやすくなるよう検討してまいります。

また、外出した際の公民館等の給湯室の利用については、職員にお声をおかけいただき、ご利用いただけたらと思います。以上です。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○8番（鈴木美香君）

館内もちろん、その、設備もなんですけど、外側って町主催の何かイベント

があるときもあると思うんですけど、そういうときも、できればテント一つ一張り張って幕をして、そこで休めるとか、授乳できるとか、おむつ交換できるようなことも、できたら考えてほしいなっていうのが、要望の一つとしてあります。

あともう 1 つ、先ほどの給湯室のところに周知はもちろんですけど、シールなり何なりを貼って、「赤ちゃんの、作れますよ」みたいな発信をしていただくと助かるかと思います。よろしく願いいたします。

では 2 つ目、子どもの数が減り続けていますが、今後ますます難しくしているのが、もちろんほかにも要件ありますけど、島での産婦人科のうみまちサポート、産婦人科の仕組みです。一部の意見ではありますが、昔ながらの産婆さん、助産師ですね、出産の方向性も考えていいのではないかと思います。もちろん、これはあくまでも一部のご意見ですけれども、助産師の育成を支援し、出産方法の選択肢を広げることができるのではないかと思います、土庄町の見解をお伺いしたいです。

○議長（濱野良一君）

健康福祉課長 石床勝則君。

○健康福祉課長（石床勝則君）

鈴木議員の 2 点目についてご質問にお答えいたします。

最初に、周産期医療の動向についてご説明いたします。

出生数の減少と歩調を合わせ、全国的に医師数や施設数が減少し、診療所と周産期センターへの二極化が進んでおります。

また、晩婚化等につきましては、ハイリスク妊婦の増加にもつながっております。このような中、産科医不足を補い周産期医療を維持するため、「分娩施設の集約化」、セミオーブンシステムが推奨されております。

小豆島中央病院においても、妊産婦健診は小豆島中央病院で受け、出産は体制が整った専門性の高い連携病院で行う小豆島セミオープンシステム（うみまちサポート）の体制ができました。その上で、妊婦さんの社会的背景にも配慮しながら医師の判断のもと、低リスクの分娩は従来どおり小豆島中央病院で取り扱われております。

議員よりご提案のあった助産所につきましては、昨年度来の小豆管内での周産期医療検討の際に、院内助産院について香川大学医学部と協議いたしましたが、離島であることから妊婦等の異常に対応することが難しいという理由で見送られた経緯がございます。

また、助産所を開設するに際しては、医療法により「嘱託する医師及び病院又は診療所を定めなければならない」とされており、小豆島中央病院が管内唯一の産科医師がいる産科医療機関である現状からは、助産院を開設することは難しいものと考えております。

町といたしましては、現在実施している小豆島セミオープンを基軸といたしまして、柔軟な運用を取り入れつつ、安全安心な出産環境の確保と、妊婦さんおよびそのご家族への配慮の両立を図っていくことが、現在取りうる最善の方法であると考えております。以上でございます。

○議長（濱野良一君）

鈴木美香君。

○8 番（鈴木美香君）

すいません、ちょっと私が知りえなかった情報で、助産師さんを検討してたっていうのはちょっと知らなかったんで申し訳ないです。やはり 50 年ぐらい前、それは半世紀昔ですけど、家で分娩するっていうのが一般的に当たり前というか、通常ということがあったこともあるので、今若いお母さん方はやはり助産師さんに寄り添う分娩っていうのをやってみたい、やってみたいっていうか、そのほうが心が落ち着くっていう方も、やはり一部おられるので、その提案をさせていただいたんですが、世界一に出産の危険度が日本はないんだそうです。やはり相当、医療的な高度な仕組みになってますので、そういうことから考えると助産師とか、助産師だけというのはなかなか難しいのかなと思うんですけど、若いお母さん方の意向がそういうのもありますので、と思いましたが、ちょっと今のところ難しいっていうのはよくわかりましたんで。はい、ということで、はい、以上です。